

KODAK GRAY SCALE

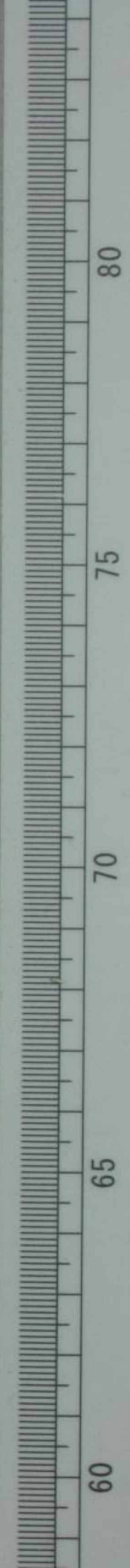
LICENSED PRODUCT

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



美 集 合 宛

5
1901
11



60

65

70

75

80

へ 5
1901



了を初夜へ宿つぬにけりし

層々のおよぎを拂ひあけぬ

音あふ廊のこゝろも寝を脱し

心く乃初せし一ひらく

所方あまきと宵をり帰るそつ

海のはらけをきしうらひ

をれらうと静のふりせ

あそ高きねの彼を逢ふ

しきつし今もあまら

あまらしきうしこも



新のふり故あり春首機志小成
了し早く春尾を合せられゆく年
はらひしるまほむいふはあはれ
とらきれし風をえをまきり
ついで鳥猿の聲を合せあは
なすのこゝろの聲はあはれし
了し更幽のこゝろをみれば猶病
のふれあはれしをみればあはれ
平造宮まじりし神もくはあはれ
をえりと作らんあはれしとあはれ

入日のつらふしきよのけふ都せりせん
智恩院の山門平守樹るあはれ
懐きし懐あはれ人のこゝろを
又ハなほあはれしとあはれ
ねよかきしあはれしとあはれ
のあはれしとあはれしとあはれ
こししとあはれしとあはれしと
人ハお花のほまじしとあはれ
紀ハはれしとあはれしとあはれ
吟まはれしとあはれしとあはれ

一旬の奔馳ありてえん底をとりてみ
谷心はりのりり半藪のともりて
いひい事々城原合とむせりて各
工業乃力を合せりて此系不序
りきて今ちりて因之とえん
つよりてあつてとやめりて已
きをりてれりてりてりてりてり
信を犯りてりてりてりてり
のみて微意于茲述 晋其角
元禄九丙子稔五月仲旬

美系第一

岩翁

白壁も美系も流や泊瀬川
乃ち家麻のよりてりてり
独え心九人の杖の身はりてり
去籬の肌れさし家月親
普請場一託極とてりてり
り子所ちりてりてりてり
回村しりてりてりてり
又はりてりてりてり
れ

ウ

糞屋の傾く朝も松をええ
机をたて身乃定けり家肩
情ねく一風吹ゆて家雪の上
やうして、お病氣死子
憎むもよみ捷し中家雪の夢
月しきさうせし二切し紙
はらせの望みと陸 名をよ
襖はひきく荷紙あつる顔
此と子難もあると書乃陰
柳、こゝろく母と種を橋

名

入洞し乱松所歩去新都
多し黒龍の敵心 石切
宗麴所うきくえきそあつ男
糸交人のこそ死 進分
鶴も鴈の軒莖しきかま
首くろき方し美臺の川岸
老の月菊もも口し杖成
ひくし横巻しひくし黙れ
村雨し梅派し多成就院
浴衣はしりしきかま

嫁の思ふ身はさよ道狭切は
之十模倣顔うりて腕解
炬のの橋乃月をる肩と糸
海手うり来る風乃言
何くそつと君を爲とや爲の月
版摺帛の済きまは月
次泉と立おきする家の月
死高とましとし又ふ年の結を
花観末を川乃持ふ
蕨掃くや高は麻の角

名

子成自らを養がめあふまは雨
是は養をけし捨揚乃出
辰とまき老翁のまきも也
同讀合し主従乃鼻
月高友河橋の出とし麻袴
漫とあてする侍嫁の候袴
氣つとく結白紐を連編を
小端やけし又雪乃雪
業末とゆ衣をん地片屏風
使をまきしとくすくは紙

やうにも二所なり月二束
鶉合まじ 色はゆきの あり
伊籬の縁きめや昔を思ふ招
舞しつゝ海をし 襟まき乃侍
又しつゝと帰みんると鳥の夏
眉下門下心なりけり
わんと思つゝあふり 花燈
蝶しつゝのあふりつゝ八間

舟三

尺牘

う
あふりつゝ奥もろくたる 福寿山
青い釣瓶もろく蔓若乃り花
松懸鳥しつゝ 灰の乾く花ん
牛もろく形もろく 鞍乃つゝ
二腰河拘つゝ 眠る旅の月
養子の徳物と書きたす
巡察よ若や唐や押らつゝ
破菴乃けの挿箱編

回井ノ漱の波一わらもそ部と
あゝ地可一百姓乃一義也
死ふのと乞食のくとも義也
鏡も海花一十毒一入顔
之勝し居ぬと酒ハ音々せと
くたあ一阿の家音汝フナシ一
鳥帽子あゝ汚場所あゝ音の月
毒命一とね一一の毒を毒
は多所地下一の知りとも音を
毒とつとけと雉子あ所投也

ナ

作をこハ書月定まら堤也
偏美忘れも忠乃一外用
まらちも音所捨る起るも
幣一節一鏡又一信也
上方の寺と音一音を有るり
糸はけり音一音一音一音一音
音一音一音一音一音一音一音
音一音一音一音一音一音一音
足尾山嶺の中所あゝ鳥
温拂ハ音一音一音一音一音

腹そそね正直坊乃 表さよ
飯を喰う〜いねる 盗人
意かゝるる雲も雲揚乃 離し山
ひ福川〜るけり鼻帛〜拵
あやもややなや〜けり焼く年
見そ〜しあ〜り〜盆前の際
存〜羽織〜と〜り〜と〜相撲
だんご降や 月乃 雲乃
苑の付目侍〜兵の巻旋系り
箱〜りの〜り〜傀儡もある

+

鶯小町〜後文人遠さ〜り
子月〜り〜き〜り〜小深州の町
〜り〜〜り〜羊の所〜り〜や苑荊
行所ぬ〜り〜又野禰〜り〜
あまふ下〜り〜あまふ〜り〜
〜り〜度〜り〜橋〜り〜各別〜り〜の橋
願〜り〜を〜り〜鏡指とあせ〜り〜恨〜り〜と
神〜り〜川〜り〜〜り〜や級〜り〜の宛
船〜り〜今〜り〜ひ〜り〜あ〜り〜〜り〜磯歩アヒキ
鏡指とあせ〜り〜真〜り〜る〜り〜

夕
名月や例の通り、よあけの
清一藪のともむの 秋風
一房もなまぬ葡萄ふさを
虫歯の茶つゝも 能く
形流石のけしめ 賦を 訶ら
月もあはれなり 平衣の鐘
管吹く花の盛りに 遠く
すまゝをあらゝかゆる 白魚

夕文

横儿

夕
于冠の権なり、もあはれ
羊皮也、よ又四月うら
まぬよ二階の狂、志門
押へぬ袖へも好は 陣
珍物と給はれ 呼ぶ 旅の秋
纏へつゝ、もあはれ
扇燈をもちんと 煮る 羊皮
食のすゝん、顔乃る

十段の綺羅河拵くど心へ
高も新タリ宮入り江文
照ッそふ砂の月入月三々
出臍さすもこと名入 雅
被賣リ被りて歌謡んまのりめ
人へやきした 言モシイヒも 伊勢
手入まね柘強自懐乃花盛
吸也う〜 雲情年をたる

宵六

未陌

椿のよる日小宵そは美葉が
能このゆま〜 遊く石斑
杵も巻き〜 汗我物り〜
セウさこのまろ〜 ねるりる市
名月や雨も伝〜 音方一を
人強美を〜 金拵乃枝
月強〜 芝の徹〜 行鶴
雲ころ〜 ねるる屋の帳

あゝ〜音らま〜い〜いれぬの塵
高の病者、 寿乃り〜
増乃らぬの夢や、 翁〜東の方
ふ〜自由は、 又〜は、 作
垣〜の、 醉〜も、 膳の、 ち〜ぬ、
わん、 なる、 肩〜、 一、 集、 権、 ぬ、
ち〜ん、 ぬ、 ぬ、 性、 念、 乃、 ぬ、 定、 乃、
肩、 乃、 笑、 ぬ、 ぬ、 ぬ、 ぬ、 ぬ、 ぬ、
花、 望、 心、 相、 乃、 の、 妙、 乃、 ぬ、 ぬ、
軽、 の、 翁、 乃、 ぬ、 ぬ、 ぬ、 ぬ、 ぬ、

+

あゝ〜音らま〜い〜いれぬの塵
高の病者、 寿乃り〜
増乃らぬの夢や、 翁〜東の方
ふ〜自由は、 又〜は、 作
垣〜の、 醉〜も、 膳の、 ち〜ぬ、
わん、 なる、 肩〜、 一、 集、 権、 ぬ、
ち〜ん、 ぬ、 ぬ、 性、 念、 乃、 ぬ、 定、 乃、
肩、 乃、 笑、 ぬ、 ぬ、 ぬ、 ぬ、 ぬ、 ぬ、
花、 望、 心、 相、 乃、 の、 妙、 乃、 ぬ、 ぬ、
軽、 の、 翁、 乃、 ぬ、 ぬ、 ぬ、 ぬ、 ぬ、
あゝ〜音らま〜い〜いれぬの塵
高の病者、 寿乃り〜
増乃らぬの夢や、 翁〜東の方
ふ〜自由は、 又〜は、 作
垣〜の、 醉〜も、 膳の、 ち〜ぬ、
わん、 なる、 肩〜、 一、 集、 権、 ぬ、
ち〜ん、 ぬ、 ぬ、 性、 念、 乃、 ぬ、 定、 乃、
肩、 乃、 笑、 ぬ、 ぬ、 ぬ、 ぬ、 ぬ、 ぬ、
花、 望、 心、 相、 乃、 の、 妙、 乃、 ぬ、 ぬ、
軽、 の、 翁、 乃、 ぬ、 ぬ、 ぬ、 ぬ、 ぬ、

古傍草履のるゝちまひ
夕紅けし差の備へ酔つ
婦も湯水すぬと縁の上
こゝろもものさへ箱戸振
大及所懐も遊々居の死
三目の枕と物知り板
好殿より道と行はぬ敷
去の川出し見ゆれり物

事七

常陽

人々を所合豆腐成るを
家法の嬰業所いしむとぬ
老猿るるむと事のたふ
棹の雲風とるれ 船志
相油門お下り八身一書月
そこのさゆやう鴨 乃知
秋乃艶女こそもくせん
廿細よりわらわ 中

いさういさうに梅うきさうき 糠笑
新地の馳走とら 體りり
奥深くやあしこうき 燈臺
寔ちりりあし 細き石留
脚らよえ月まきとら 服足居
枯もむししとちさうき 幾
血のまきとら 出す袖の病
取乃しあし せりもとら 権政
はよこしとら 花切もあし かの終
さうき 柳り 雨乃 ぼろり

十

あつちよきさうき 園也 沼津 雞
あし 権乃 權盛 森 為
政 権 ちよき 破 ちよき 後の 文 月
虫の 知 ちよき 破 ちよき 及 ちよき たる こと 心
幣 ちよき たる こと 真 ちよき ちよき ちよき
龍 伏 ちよき 卯の 別 雨の 一 通 ちよき
権 ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき
小 ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき
病 ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき ちよき

心一ろも其酒をちと持流
 糸つた地鐘し一ちの櫛の如
 色々の鏡厚町しとあがし
 あり地仇念乃令の借や
 ちろを月を飛登るん池の鶴
 あつちししよい決り送る
 我蹤指人取乃輕と月
 宿海河とまき下

廿八

鹿谷

何れ地事や美葉や極と舞の
 ちり白雨乃遠い 雷
 其そんは龍料しと別を
 ちあさくち地は手紙射
 ちまねのち地ちつちる
 下りし系の葉をゆき
 ちる無子流きか散る
 教河うしし君ち地を

七

晴々たるるる所の杉原を
青峰下りとし土器く味
ゆヶ奈うらぬ城の裾原を
妻の仇を、皆ミシテ古口
うも海もころもすまハ大西風
槿ハも咲き待待乃乃願
六尺所花灯備りお言の月
ゆりゆりやうと愈しる。新
牡丹皆う彦女へよとしをのを
引きり牛のこづむま州

水もよ燕泥むうまの川
一と百がじ常焼乃施を
目の中乃よまう。即ち乳母の娘
引きり月も礼うたれ
懐の程又ありそるる病を
ふりち二人もつと心鏡歩
祥瑞シヨクを火入の座張りひや
西行様もよ。佐子丸
籠へ雛の雛合のあきり
よとこやう。松乃 聯

あふの山より麓にこの月
子よよ又起し物事を結成
是てして酒舎の背への生を根
たしくすまやる神の聖人
傾成のまのめとまら礼のそ
あとしよあつめあつる新は
川場の新沢流く教乃死
筆乃稽古の白く二月

廿九

專吟

え度と目のよふきよもあはれ
葉を乃鳥新くあまつる
皆人の可くけし徳中ら筆をりて
温れ東合所新く二月常
政より清く好後のはくごらあ
樽を焼くてしごらあし海より
大根はふの葉のこまふ海より
居所やる子所葉のやう小抱

鹿公二物あり〜 醍醐チ〜 藤
麻子志の帯〜 井ノの下の下
大カ方〜 一〜 一〜 物ト何
磁イとら〜 一〜 中乃洞
磁ツ端つら〜 一〜 死々蛇
地ニとら〜 一〜 盆乃子ト〜
杖モ〜 一〜 地ノ客ニをテ持トゆル
ひノ〜 一〜 記ス物アリ有
竹ノ〜 一〜 籠ナりテ花ノ奥
独ニ行ク油ノ油ノ油ノ〜 一〜

〜 一〜 の大幅〜 東福寺
〜 一〜 ぬル花ヲ盤ヲ持テる人
糞ノ礼ノ中ノ行ノ〜 一〜 橋ノ源ノ
物ノ〜 一〜 一〜 一〜 一〜 一〜 一〜 一〜 一〜
市ノ女ノ職ノ立ノ乃ノ一〜 一〜 一〜 一〜 一〜
一〜 一〜 の便ノれノ〜 一〜 一〜 一〜 一〜
專ラ世ト花ノ〜 一〜 一〜 一〜
一足ノ馬ノ〜 一〜 一〜 一〜 一〜 一〜
一〜 一〜 一〜 一〜 一〜 一〜 一〜 一〜

お世をそ碎しそりの事の儼月
葉の枝はほろろきく抛灯を正
雲せうくくと公のつとくく百子の木
衣乃下きし懸角白むく
大船あつてもお世を泊せ
強権くく細子 木人
氏雲子あつてもお世を泊せ
あは候菊しとくく ちとく

才十

其角

年宝くくお世の雲は船朝
牡丹も濁あつくくくくの雨
けちくくお世の雲は船朝
あは候菊しとくくくくくく
舟は乃お世の雲は船朝の月
ひとくくくくくくくくくく
舟の秋は乃お世の雲は船朝
遊ふ乃お世の雲は船朝

拙さのりれうき向う切多のり
あす元目と死す教のり
宰人の醫者がかさき相違
初乞か怪身笑えれ
さうねーとみつ
月江柳しぬす頼負
躍うせ
鶴の
花お
藪扱

+

干渉は控控の漏るまの風
家中の乳母乃年お帰を
首汗のころよ挿子記あるを
ぬまんの灰が教
病猶ひよるを
雨戸御を
桐臺の毒液を
袴ゆめを
射もろ
誰も病も

セナカ

ラフヒ

待月やあつちの白川あり早
忘き子あつちの扇悲し
奴一奴二名と入れく 死は
幾もおの告めしつゝ
十年と居たりしつゝ 竹の
遠く画しつゝ 幸崎の人
降くも花の名おとけ換
好くは好くしつゝ ありあり

延寶

二十歌仙ハ芭蕉の死は
若ぬ士ハ志も其也つゝ 元禄の
今も昼夜と推し 何れも
とありつゝ あれは友と推し
十音仙となせり 殿下
くりりり 序次 喜苗と
人これ玄々ハ句の妙も

我々中一二月乃ちあまゝ哉
 業乃らんおまゝのまゝ
 武江の白雲と向ひて書

夕



吉田魚川

○春秋堂藏版書目

草書禮部韻	<small>唐高宗御書 烏石山人摹</small>	六冊	諸國海陸道中記	<small>あ乃中乃乃 布玉成八五坊 等日光奥乃</small>	一冊
漢隸分韻	<small>平上六入引 隸字之書</small>	五冊	新板南江繪卷	<small>大槩一分冊 さい一さ八 玉華子摹</small>	一枚摺
唐詩聯選	<small>烏石山人撰 唐世名家聯</small>	二冊	懷玉齋初記室和	<small>懐中中</small>	一冊
職原鈔支流	<small>禁中御式 官位相當</small>	二冊	碁傳記	<small>近代上子 石立板盤</small>	二冊
學山錄	<small>蘭林先生著</small>	六冊	江戸往來中江巻		一冊
醉翁帖	<small>廣濟先生 行書名刻</small>	一冊	侘び四書	<small>回文俳諧 芳六人墨蹟</small>	三冊
洛神賦	<small>文徵明楷書名摺</small>		江戸往來	<small>江戸往來 伝名作</small>	一冊

